

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第7話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ（30）：騎士団長

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノの皇女

シャーニューニダ：魔族

ニユンリン：魔族

嵐宮芽里：夕杜王国の王女

浮世心愛：五龍（ゴーゴニペ）

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア
の王女

ジャンキサス（40）：ポストゼラン

ガロニア国王

ヒュール：情報屋

兵士長：兵士長

○地下牢・通路

金属が光を反射する地下牢。

ルチェリールタ、ニユンリン、シャー

ニューニダ、槍を向けられている。

ルチェリールタ「待ってください！　いった

いなにがあったんですか！」

ルチェリールタ、叫ぶ。

声が反響する。

兵士長「とあるルートで情報提供を受けていてな。シャーニューニダ、とある工場で侵略者に協力していたプラス、500年前にこの国の王城から技術を盗んで逃亡。国家反逆罪。ルチェリールタ、この国に来るまでの船で凶悪な魔族ニユンリンと行為に及び、子を成そうとしていた」

兵士長、淡々と説明する。

ルチェリールタ「嘘でしょ！？　なんでバレ

てんの！？　はず……ってそんなこと言っ

てる場合じゃないよね……」

ニユンリン「あーしのヌノでの悪行がこんな

どこにまでバレてるってこと？ でもあれ
は一件落着になったんじゃ……」

ニユンリン、驚く。

シャーニユーニダ「500年前とはなんのこ
とだ？ 我はこの国の王城に來た覚えなど
ない」

兵士長「しらばつくれてもいい。そんなこと
でここから出れはしない……お前たち、こ
いつらを牢にぶち込め！」

兵士長、叫ぶ。

兵士たち、3人に魔法つきの手錠をか
け、牢屋の中に入れる。

○プリマダンケ城前

浮世心愛「で、わらわたちはどうすればよい
のじゃろうか？」

心愛、チビイをなでながらアル
ノ・ヨナに聞く。

ヨナ「中に入っているのヨナ。芽里とシャー
ザベスラの客人ってことで歓迎するのヨナ」

心愛「あやつらは歓迎されぬのか？ 別に何も法律違反などしておらんじやろう」

ジャンキサス（40）「立ち話はいいいから、さっさと中に入れ。ヨナ、案内して差し上げろ」

ヨナ「あたしが案内してあげるのヨナ！ このかわいいちびっこ魔族ちゃんも入るのヨナ！」

ヨナ、チビイの方を向く。

チビイ「ボクもか？」

ヨナ「そうなのヨナ。きみのことを歓迎するのヨナ！ だから中に入るのヨナ！」

嵐宮芽里「行きましょう、チビイさん」

チビイ「お、おう……わかったぜ。でもあいつらはどこ行っただ？」

ヨナ「わかんないのヨナ」

ヨナ、体でわからないを示す。

一行、城の中に入っていく。

○酒屋・内部

ヒュール、扉をあけて酒屋の中に入る。

バーテンダー「いらっしゃい。今日は何に
ていく？」

ヒュール「いつもの」

そう言い、バーテンダーの目の前の席
に座る。

ヒュール「知ってるか？ 魔法王国ヌノの騎
士団長が投獄された。もうじきニュースに
なるだろう」

バーテンダー「そうなのか？ って、どうせ
また」

バーテンダー、ヒュールにカクテルを
渡す。

ヒュール、ぐいっとそれを飲み干す。

ヒュールの懷から電子音が鳴る。

ヒュール、携帯端末を耳にあてて会話
している。

○プリマダンケ城・大広間

チビィ「すっごい綺麗だな」

ヨナ「城だから当然なのヨナ」

5人と1匹、城の中を進んでいる。

規則正しく並んでいる兵士たちの前を
通ると、兵士たちがジャンキサスたち
に向かって敬礼をする。

○プリマダンケ城・王座の間

ジャンキサス、王座に座る。

ヨナ、ジャンキサスの隣へ。

ジャンキサス「嵐宮芽里。シャーザベスラ。

ならびにその客人たち。今日は遠路はるば
るご苦労だった」

芽里M「これが今のポストゼランガロニア国

王……」

王妃（42）「こんにちは」

芽里、シャーザベスラ、心愛、片膝を

ついて礼儀正しい姿勢になる。

チビイM「敬礼？ とかどうすればいいかわ

かんないな……」

チビイ、シャーザベスラの肩にちよこ

んと乗る。

3人、立つ。

ジャンキサス「で、今日王城に来た目的は？」

芽里「はい。私たちの旅にヨナ：アルノ・ヨ

ナ様をご同行させて頂きたく参りました」

ジャンキサス「そっちのチビ魔族と仮面の女

は？」

ヨナ「――」

ヨナ、ジャンキサスに耳打ち。

ジャンキサス「そうか。では歓迎しよう。ヨ

ナ、王女たちの頼みを受け入れるのか？」

ヨナ「もちろんなのヨナ！ あたしがあいた

後の城のほうが心配なのヨナ！」

ジャンキサス「それは心配いらん、任せろ」

ヨナ「ありがとうなのヨナ！」

ヨナ、王座前の階段を降りて3人と1

匹のもとへ。

○プリマダンケ城下町・住宅街

ヨナ「なるほどね、わかったたのヨナ」

芽里「話が早くて助かります」

チビィ「わかったのか？」

ヨナ「そうなのヨナ。あとごめんね、実はとある情報網からあの３人の行方は知ってるのヨナ」

ヨナ、真剣な表情になる。

ヨナ「あの３人は……投獄されたのヨナ」

チビィ「……嘘だろ！？　なんでルチェリー
ルタが！」

チビィ、あわてふためいて飛び回る。

○地下牢・牢獄内

３人、牢獄の中。雰囲気がいりついて
いる。

ルチェリールタM「うわぁー！　空気最悪」

っ！　気まず！」

ルチェリールタ、微妙な顔をしている。

ニユンリン「ルチェリールタ、ごめん……」

シヤーニユーニダ「で、どうする。お前たち
の情事で逮捕、投獄されたわけだが」

ルチェリールタ「いや、さすがに予想外だったよ。他国の法律全部は理解してないし、ニュンリンのことは芽里さんがなんとかして収まったものだとばかり……ニュンリンと」

シャーニューニダ「……そうだな。確かに、いくら騎士団長とはいえ性行為くらいするし、魔族との性行為が法律で禁止されていとは思わないだろう。騎士団長でもすべての法律を理解は難しいだろうしな。おそらくは、ニュンリンの無害化の部分は伝わらずに、悪行とルチェリールタとの性行為のみが伝わったのだろう」

シャーニューニダ、蒸すかしい顔をしている。

ルチェリールタ「いや待って、性行為連呼しないで……恥ずかしいから……こんなレズ行為バレたら終わるって……皇女様にバレてないよね!？」

ルチェリールタ、壁で縮こまっている。

ニユンリン「あれ、シャーニューニダ珍しく
あーしに噛みつかないのね」

シャーニューニダ「性行為ごときに文句言う
よりも考えるべきことがある。あの兵士の
発言についてだ」

○（回想）地下牢・通路

兵士長「とあるルートで情報提供を受けてい
てな。シャーニューニダ、とある工場で侵
略者に協力していたプラス、500年前に
この国の王城から技術を盗んで逃亡。国家
反逆罪。ルチェリールタ、この国に来るま
での船で凶悪な魔族ニユンリンと行為に及
び、子を成そうとしていた」

兵士長、淡々と説明する。

（回想終わり）

○地下牢・牢獄内

シャーニューニダ「やつは我のことを知って
いた。詳細は知らんが、芽里がちらつと言

っていた情報屋か」

ルチェリールタ「そういえばそんなこと言うてたっけ」

シャーニューニダ「そいつがこの国の技術を使ったバレない監視カメラとか何かで知ったんだろう。ルチェリールタとニュンリンのこともな。だが、我がもといた工場は森の奥。そんなところまでどうやって監視アイテムを仕掛けたのか」

シャーニューニダ、腕を組んで考えている。

シャーニューニダ「それに、あの兵士は私のことを『500年前にこの国から技術を盗んで逃亡』と言っていた。この話を聞いて、何か思い浮かばないか？」

ニュンリン「あーしが見たあの男」

シャーニューニダ「そうだ。我らが今追っているやつだ。仮に世界の破壊者とも呼ばうか」

ルチェリールタ「情報提供って言ってたから、

情報屋の情報で間違いないはず……ならならんでここに来たこともないシャーニューニダを？」

ルチェリールタ、シャーニューニダを見る。

ニユンリン「他人の空似？ 濡れ衣で、情報屋の策略？ そういえば、シャーニューニダのお兄さんって生きてるの？ もしかしてお兄さんが？」

シャーニューニダ「兄は行方不明だから、なにもいえないのが怖い。兄が世界の破壊者だなんて考えたくないな……」

ニユンリン「シャーニューニダ、お兄ちゃんのこと好きなの？」

シャーニューニダ「尊敬しているだけだ」

シャーニューニダ、どこか寂しそうな表情をする。

シャーニューニダ「破壊者は魔族だから生きているのがほぼ確定。自分が作った兵器に殺されるなんてバカな真似はしないだろう。

いずれにせよ、我らは厄介なことに巻き込まれてしまったな」

シャーニューニダ、表情が暗くなる。

ルチェリールタ「ニュンリン。わたし、同性愛者で……ニュンリンに初めて会った時にどぎまぎしてたのも、うちの国の皇太子様との結婚に乗り気じゃなかった理由の半分も、同性愛者だからなの。結婚拒否のもう半分は、家族といたかったから」

ニュンリン「じゃあ、演技って言ってたのは？」

ルチェリールタ「魅了の魔法にはかかってないけど、ニュンリンに犯されて気持ちよかったのは本当ってこと……」

ルチェリールタ、顔を赤くする。

※ ※ ※

(フラッシュ)

ルチェリールタ、ニュンリンに男性器を挿入され、腰を振られてアヘアヘする。

※ ※ ※

ニユンリン「そういうことね……」

ルチェリールタ「気にしないでいいよ、わたしは女の子とするのを望んだんだから。まあ、投獄は芽里さんたちがなんとかしてくれるんじゃないかな」

ニユンリン「だといいけど……」

3人、心配そうな表情になっている。

ニユンリン「一応聞いとくけど、なんとかぶっこわして出るのは？」

ルチェリールタ「だめに決まってるでしょ」

ニユンリン「やっぱそっか」

○プリマダンケ城下町・掲示板前

ざわざわしている民衆。

芽里たち、掲示板を眺めている。

そこには、ルチェリールタとニユンリンが船のトイレで性行為をしている画像が貼られていた。

芽里「2人が性行為に及んでいたから逮捕さ

れた？ ニュンリンが凶悪な魔族だから？

それは私がなんとかしたはずでは……ヨナ、これはどういうことです」

芽里、ヨナをギッと睨む。

芽里「ここまでプライベートを晒すのは認められてるのですか？」

ヨナ「えっと……」

芽里「(怒った様子で) 答えなさい！」

芽里、ヨナの胸ぐらを掴む。体にバチバチと小さな雷がまとわれる。

民衆が芽里たちを見ている。

芽里「この情報の提供元は、例の情報屋ですね？ 今すぐ案内しなさい」

ヨナ「な、なんでそんなに怒ってるのヨナ？」

芽里「誰であっても、人間の尊厳を踏みにじってはなりません！ ましてやこんな方法で！ 騎士団長だって行為に耽りたいことくらいあるでしょう！」

芽里、掴んだ胸ぐらを離す。

チビィ、その様子を見てびくつとする。

芽里「あなた、調子に乗ってますね？ 昔から、その楽観的な態度が嫌いでした」

シャーザベスラ「僕もだいたい同じ意見だ。

あいつが救世主だってことを抜きにしても、
こんなのひどすぎる。なんで野放しに
して
んだよ」

シャーザベスラ、ヨナを睨む。

心愛「まあまあ芽里、落ち着くのじゃ。周りが
じろじろ見ておるぞ」

芽里「……」

芽里、黙り込む。

心愛「お主、イエフリストのことは知ってお
るじゃろう」

ヨナ「知ってる。あの騎士団長が救世主なん
でしょ？」

芽里「早く行きますよ！」

ヨナ「でも、一度投獄されたら」

芽里「わかってます、裁判でしょう。私たち
で皆さんを助けます」

ヨナ「期限は一か月なのヨナ。だから、夕杜

に無罪の証拠があるなら取りに行った方がいいのヨナ」

芽里、シャーザベスラ、心愛、頷く。

○地下牢・牢獄内（夜）

ルチェリールタたちがいる牢獄に向かつて、看守が歩いてくる。

看守が、牢屋の前に立つ。

看守「お前たちに言っておく。1月後に裁判が執り行われる。被告人はお前たち3人だ。裁判だから証人が出廷するが、犯罪者のために出廷など誰もしないだろう。期待はしないでおくんだな」

そう言い残し、どこかに去っていく看守。

ルチェリールタ、息を荒くしながら股を触る。

ニユンリン「ルチェリールタ。シてあげようか？ 夜遅いし、周りの囚人もほぼ起きてないよ」

ルチェリールタ「う、うん……」

ニュンリン「シャーニューニダ、目つぶつと
いて」

シャーニューニダ「わかった」

シャーニューニダ、目をつぶる。

ニュンリン、ルチェリールタを押し倒
す。

ニュンリン「どうせバレてるし、変わんない
かな」

ルチェリールタ「あ、でも余罪がつくかも……」

ニュンリン「おんなじでしょ。だったら、有
罪になる前にやっとうよう」

ニュンリン、魔法で男性器を生やす。

ルチェリールタ、全裸になりM字開脚
する。

ルチェリールタの女性器に、ニュンリ
ンの男性器が挿入される。

ルチェリールタ「あ！ あんっ！ ああんっ
！」

ルチェリールタ、激しく喘ぐ。パンパ
ンと乾いた音が鳴り響く。

ルチェリールタ「あっ、ぎもちっ、ぎもちい
っ」

ニユンリン「あは、あははっ！ ルチェリー
ルタ、すっごい喘ぐじゃん！」

ニユンリン、笑っている。

ルチェリールタ「あっ、イク、イクウツ！

イクッ！ イッぐ！」

ニユンリン「えっちすぎでしょ」

ルチェリールタ「ああっ！ ああっ！ やあ
っ！ やっ！ イク！」

激しく喘ぐルチェリールタ。

ニユンリン、ルチェリールタの乳首を
口でくわえる。

ルチェリールタ「ああんっ！」

ルチェリールタ、びくつと腰を振るわ
せる。

ルチェリールタ「あへ、あへ……」

ニユンリン「もう一発いくよ。お尻向けて」

ル
チ
エ
リ
ー
ル
タ
「う、うんっ」

ルチェリールタ、尻を向けて四つん這いになる。

ニ
ユ
ン
リ
ン
「ほ
ら
っ
」

ルチェリールタの女性器に、ニユンリの男性器が挿入される。

ルチエリールタ「おほおおおッ！」

舌を出し、オホ声を発する。

ニユンリン、息を荒くしながら笑っている。

パンパンと、乾いた音が鳴り響く。

ル
チ
エ
リ
ー
ル
タ
「
イ
ツ
ぐ
う
う
う
う
う
う
う
う

う う
う う
う う
う う
う う
う う
つ う
つ う
つ !
つ イ
つ ぐ
つ う
つ う
「 う
う

ビクンビクンと、何度も激しく腰を震わせ、絶頂。

○船・個室（夜）

芽里「ジャンキサス国王は、人間のようでした。いくら手練でも、実力を隠すのはかな

り難しい。私たちは、イエフリストが残した言葉にある世界の破壊者が、もしかしたらジャンキサス王ではないかと踏んでいたのですが、どうやら違ったようです」

芽里、ベッドに座る。

心愛「ま、わらわたちは無罪の証拠を取りに行こうかの」

○宿屋・個室

チビィ「（恐る恐る）な、なあ」

シャーザベスラ「なんだい？」

チビィ「ルチェリールタがあんなことしてたの、怒ってるのか……なんかあんなことやってたせいでなんか旅が遅れてるし」

チビィ、申し訳なさそうにふるふる震える。

シャーザベスラ「怒ってないよ」

と、チビィを抱きかかえ、優しくなでる。

シャーザベスラ「道を外さなきゃ、生き方は

自由なんだ。女の子どうしで、人間と魔族で結婚したっていいさ。事例は少なすぎるけどね。夕杜だと同性婚できないから、ヌノ人でよかったね」

ヨナ「百合は尊いのヨナ」

チビィ「お、おう。あいつ、ニユンリンと結婚すんのかな？」

N「こうして一行は三手に分かれ、1カ月後の裁判の日を待つことになった……とさ」